

## ミキ先生の決断力

伊 東 亮 三

昨年暮れ、近頃の全く記憶のない女の方から、その地の高価な味覚の品をお歳暮にいただき、恐縮するとともに当惑し、色々と心当たりを調べたがどうにもわからない。そこにミキ学長のご訃報に接し、さてはと同窓会名簿を調べ、三十年近く前の栄養科の卒業生であることがわかり、丁重な礼状を書いた次第である。

また先生のご葬儀のあと、先生、覚えてくれますか」とまた別の女性から声をかけられた。英文学科第一期生であったが、永い間接触もなかった卒業生二人に、定年前にたまたま連絡がとれ、お会いできたのは、先生のお引き合わせ以外には考えられない。その英文学科出身の彼女が言われるのに、学生時代に、学長先生がよく、伊

東先生が……」と言われていたと。

どんな話だったかわからないが、私は可部女子短大に食物栄養科が出来たときにお世話になり、広島文教女子大学設置二年後に可部を離れた。ちなみに四年制への昇格時、大学名をどうするかとみんなで頭をひねったが、文教という名は私から出たのではなかったかと、横山先生は嬉しいことを書いて下さっている（武田学園創立三十五年記念誌）。当時、学長先生は可部という名称に愛着を持っておられた気がする。

私の在職中は、本大学の黎明期であり、学生定員も仲々充足しないという状況の下、みんな運命共同体のような気で大学の発展を願ったものである。そういう雰囲気になるのは気取りもなく、何でも包み隠さず話されてみんなの助力を求めるミキ学長のお人柄によった。このことは特筆すべきことであると今も思う。家庭的空気の中で、ミキ先生は母親のような存在で、「学長」といった乾いた名の方ではなかった。私は忘れていたのだが、三、四年前お電話をいただいた折、かつて私が退職した直後、当時住んでいた府中町の自宅までご挨拶に来て下さったといわれて、恐縮するばかりであった。

先生については、その類いまれな教育的情熱と行動力、明治人としての質実さなどが語られると思うので、私は別の先生の側面に注目したい。

私は、先生はすぐれた決断力をお持ちの方だったと思う。短大を拡大し、また四年制へと進められる時に下にいたわけであるが、先生が専門学校から女子高を、また女子短大を作られ、さらに四年制女子大へ進められる各段階における経営のトップとしての決断の苦しさには、人力を超えるものがありではなかったかと思う。私などのさやかな経験からも、長というものの責任の重さと決断の苦しさは大変なものである。このことは、組織の中で一

番近くにいるナンバー2の人でもわからないことではないかと思う。それも公的組織では私企業である私学経営において、厳しい決断を繰り返されて今の大学の発展を築かれた先生のお力には敬服するばかりである。

その際、新しいことを始めるか始めないかの決断を、先生は何に基準をおいてなされたのか大変興味がある。落ちついたら新たな学長さんや横山先生にゆっくり聞いてみたい気がする。ミキ先生が近代人で営利を求められる方ならば先生の決断の基準は想像できるのだが、そんな方では決してない。かといって単に教育的情熱だけで説明できるものではない。

二、三年前の夏休みだったが、永い御無沙汰のお詫びと御機嫌伺いに大学を訪れた。休みにも古い学長室におられたのだが、お別れの挨拶をして階段を降りるとき、わざわざ送りに出られ、じつと見ながら、「伊東先生、まだ昔の面影がありますなあ」と少し頭も薄くなつた私に申されたのが、私にとって、先生の最後のお言葉であった。